

# 本薬師寺出土建築部材

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

前年度年報で報告したように、本薬師寺1994-2次調査において、回廊内から計4点の建築部材を検出した。このうち主要堂塔の建設年代上限を示す史料と考えられる2点について、ここに検討結果を報告する。

本薬師寺の東西両塔を結ぶ石敷参道SF222に重複して柱掘形SX277とSX280を検出した(図1参照)。掘形は、一辺約1.4m、深さ約1.5mの隅丸方形で、参道内に収まるようにして南北に並ぶ。掘形の時期は不明だが、抜き取りは参道石敷を壊しており平安時代と思われる。掘形底部には、礎盤が1本ずつほぼ南北方向に据えてあった。礎盤はヒノキの建築部材の両端を切断したもので、SX277の材は、残存長約127cm、幅は端部で19cm、中央部で20cmあり、高さ(成)は25cmを測る。SX280の材は、残存長約150cm、幅は端部で20cm、中央部で22cm、高さは26cmを測る。ともにやや外側に傾くがほぼ水平で、SX280では掘形壁面をえぐって端部を納め、水平に据えようとしていた。礎盤周辺には、複数の凝灰岩切石の断片が落とし込まれており、SX277では軒丸瓦や面戸瓦、熨斗瓦なども詰められていた。面戸瓦には朱が付着していた。これらは軟弱な地盤を補強するために入れられたと思われる。その出土状況については概報掲載の写真を参照されたい。

2つの遺構は、部材の据え付け方や高さが同じであることから一対の遺構と認められ、参道内に収まること、金堂基壇東辺の南延長上にあることなどから、幢竿のような施設であったと思われる。各部材の一方の端部には、隅行きの力肘木を置く斜めの欠き取りと、直交する他の通り肘木に乗るための直角方向の欠き取りが上下にあり、もとは通り肘木の上木であったことを示している(図2・3参

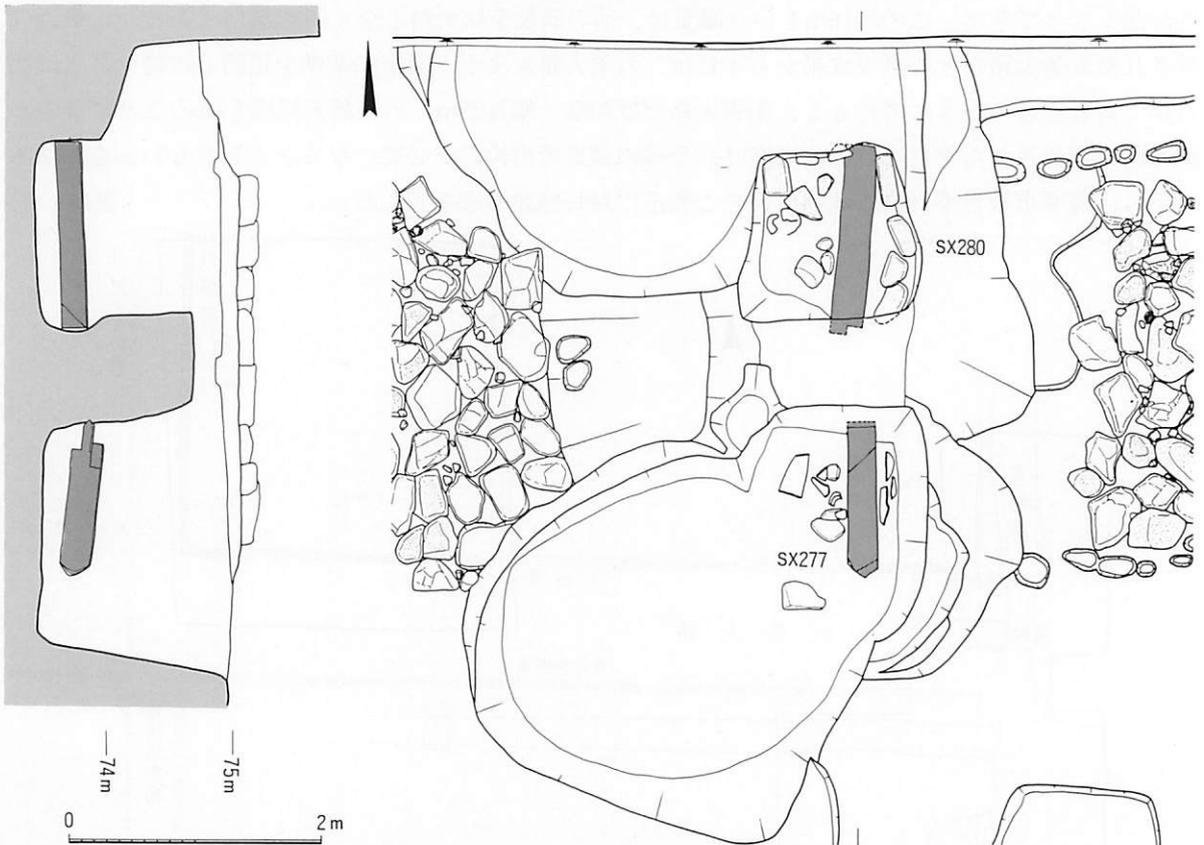


図1 遺構図および南北断面図 1:60

照)。斜めの欠き取りが水平であることから、組物と同レベルの位置に用いられる通り肘木であり、保存状態が良好であるにも関わらず風蝕がほとんどなく壁の痕跡も認められないこと、全面がチョウナ仕上げであることから入側筋で用いられていたものと思われるが、圧痕が認められないことから未使用の材であった可能性もある。また両者は、材質・形状・仕上げ状態・風蝕程度などが極めて類似しているので、同一の建物に用いられる部材であった可能性が高い。

このうちSX277から出土した材は、192層分の年輪が認められ、ヒノキの暦年標準パターンの504年～695年の年代位置で照合が成立した。これには3.3cmの辺材部が含まれるので、伐採年は695年と確定した。したがって、これらの通り肘木を用いたか、あるいは用いようとした建物は、695年（持統九年）に材木の伐採を行っていたことが判明した。文献によれば本薬師寺は、天武九（680）年に発願され、持統二（688）年には無遮大会を設け、持統十一（文武元年、697）年には開眼会を開き、文武二（698）年には構作がほぼ終わったとされる。これらの部材に対応する建物は、材木の運搬・乾燥・加工・仕上げ工程を考慮すれば、完成が文武朝に入ることはほぼ間違いないと思われるが、であればどの建物であったかが問題になる。そこでつぎに部材寸法からこれを検討した。

表1に主な同時期の現存遺構の通り肘木の断面寸法を比較している。このうち法起寺三重塔と平城薬師寺東塔のものは修理報告書と調査報告書にみえる当初材の寸法の平均値を掲載した。しかし法隆寺と唐招提寺のものは実測値ではあっても当初材かどうか不明である。また、部材寸法は1cm内外のばらつきがあるのが普通だから、数値の差は絶対的なものではなく厳密なことはいえないが、出土部材の断面寸法は、明らかに法隆寺五重塔と法起寺三重塔のものと近い。薬師寺東塔の場合は、当初材の現在の寸法は出土部材よりも小さいが、調査報告書の中で材の痩せを考慮して復原している成とは一致している。出土部材の場合は、地下水に浸されていた時間が長いので、痩せはそれほど進行していないものと考えれば、むしろ薬師寺東塔の部材寸法に近いとしてよいのかもしれないが、その際には縦横比の違いが問題になる。また、このように考えた場合は、法隆寺五重塔と法起寺三重塔の材寸が出土部材よりもやや大きいことになる。いずれにしろ出土部材の断面寸法は、7世紀末期の塔のものとしてそれほどおかしくないが、幅が広いことに注意を要する。

一方、中門は法隆寺1例しかなくしかも当初材か不明であるので曖昧だが、痩せを考慮しても幅が狭く縦横比も異なる。金堂は、法隆寺では大きすぎ唐招提寺では成と縦横比が異なる。

以上のように部材寸法からみると塔のものである可能性が高いが、この部材が用いられた遺構は東塔に対する施設と思われるので、かりに東塔のものとみれば未使用材であるか、大規模な修理の際に取り外されたものとみななければならない。また講堂の可能性もあるが、共に出土した面戸瓦に朱が付着し、重層の建物のものであったことをどう考えるかという問題がある。この史料をどう解釈するかは、今後ともあらゆる条件を検討しつつ慎重に進めなければならない。（藤田盟児）

建物名	SX277出土材	SX280出土材	法隆寺中門	同金堂	同五重塔1～3層	法起寺三重塔(各層共)	薬師寺東塔1・2層	同復原値	同3層	唐招提寺金堂
成	25	26	24.5	27	26	25～26	24.5	26	24	24
幅	20	21	18.3	22	21	20～21	19		21	21
成/幅	1.25	1.24	1.34	1.23	1.24	1.24～1.25	1.29		1.14	1.14

表1 入側筋通り肘木の断面寸法比較表 (単位:cm)

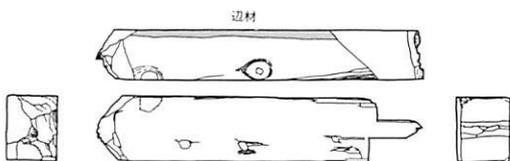


図2 SX277出土建築部材実測図 1:30

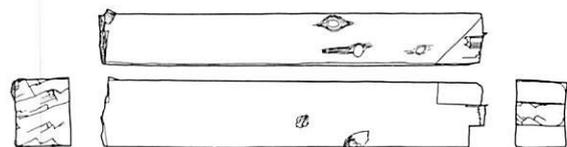


図3 SX280出土建築部材実測図 1:30